

## 事業完了報告書

### 調査研究期間等

調査研究期間	委託を受けた日 ～ 令和8年2月27日
調査研究事項	<p>IV. その他夜間中学における教育活動充実に関すること</p> <p>①SSWを兼務できるSC</p> <p>②校外学習</p>
調査研究のねらい	<p>①SSWを兼務できるSCについて</p> <p>★カウンセリングを必要とする夜間中学生の増加に伴い、SC配置の回数増加。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ SC対象者の拡大 (SSW)</li> <li>・ 教員の資質向上と学校組織体制の確立</li> </ul> <p>★SSWによる学校外の関係機関との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 夜間中学生の子どもが通う学校との連携</li> </ul> <p>②校外学習について</p> <p>★主体的な学びと協働的な学び</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 野外活動と火おこしの効果 (人間関係力向上、ストレス軽減、「生きる力」の育成)</li> </ul> <p>★交流の深まり方</p>
調査研究の成果	<p>①SSWを兼務できるSCについて</p> <p>今年度は、昨年度からの継続で4名の生徒が教育相談を実施しました。SCの回数が増えることで定期的なカウンセリングが可能となり、見通しをもって計画的な支援や学習ができました。個人によって違いはありますが、生徒自身も意識して、次までの課題をもつなど主体的な様子が見られました。特に、長いスパンでのカウンセリングを要する生徒にとって、そのことは大きな前進だったとSCからの見立てもあり、担当教員においても、支援の方向性を明確にし、より適切な支援へとつなげることができたと報告されています。</p> <p>さらに20回と回数が増えることで、SCの姿や教育相談室が活用されている様子を多くの生徒が目にするようになりました。それが日々の生活に安心感をもたらし、相談者数が増えることにつながりました。カウンセリングの合間に教育相談室を訪れてSCと話</p>

をする生徒がいて、そこからカウンセリングにつながった例もありました。現在、あわせて7名のカウンセリングが行われています。

これには、教員の教育相談への認識が深まったことも要因の一つになっています。昨年の生徒理解に関する研修に引き続き、今年度は「学校における生徒支援、社会資源の活用と連携」というテーマで、SCによる校内研修を実施しました。(別紙1)毎回実施してきたカウンセリングの後の教員へのフィードバックの共有も回を重ねるごとに、教員の生徒に対応する姿勢に変化をもたらしています。(別紙2)そして、生徒の状況を理解した上できめ細やかな支援を行うという認識が他の生徒への支援にも生かされてきています。

さまざまな年齢層の生徒がいる中で、SSWを兼務できるSCの存在は必須です。今年度の相談内容は、上級学校への進学、就職活動、子育て、家計の運営、職場の人間関係、SNS上の人間関係、高齢者としての悩みなど非常に多岐にわたりました。その中でも生徒の在住市役所の福祉課、納税課、社会福祉協議会への同伴、就労支援機関のサポートセンターとの連携など、SSWとの協働を進めることで生徒の悩みを解消した事例が、現在進行中のももあわせて3件あります。解決には至らなかったものもありますが、一緒に悩みを共有し実際に一緒に動くことが、生徒の心のケアにつながったと考えています。

30代から50代の生徒が多いのが本校の特徴ですが、その生徒の多くが「子育て・子どもの教育」の悩みをもっています。今年度は、その課題についてSCと相談し以下の取組を進めました。

- ①生徒に対して、子育て上の悩みを聴く。
- ②生徒の子どもに対して、宿題などの学習の支援を行う。
- ③子どもの学校（教育委員会を含む）に対して、家庭訪問や三者懇談に通訳等もかねて同伴する。保護者の許可を得たうえで情報共有を行う。そのほか連携のあり方を考えていく。

特に、上記の①を行い解決が必要だと考えられる生徒とその子どもに対して、SCのアセスメントにもとづいたアドバイスにしたがって進めていきました。以下にその中から3つの事例をしめします。

■生徒A:子どもが日本語ができないこと。クラスで友だちとトラブルを起こすことが心配。

- ・子ども：小学校中学年 海外から小学2年生の時に来日。  
家では家族と母語を使って会話
- ・夜間中学での取組  
毎日Aさんが登校するとき一緒に来て宿題をしたり、話をしたり、実習の時にも一緒にすることで、日本語を使う機会を増やす。
- ・結果  
夏の長期の休みの間も毎日夜間中学に来ることで、2学期以降、日本語も上達し小学校で今までよりも積極的な様子が見られようになった。また、友だちとのトラブルが少なくなったと生徒から報告あり。

■生徒B:子どもが算数ができないのが心配。

- ・子ども：小学校中学年 外国ルーツのお母さんと2歳の時から夜間中学に来ている。70歳代のお父さんは日本人だが、教えてもらえない。
- ・夜間中学での取組  
週に1回夜間中学で、宿題ボランティアに勉強を見てもらう。教員がわからないところを教える。
- ・結果  
算数は小学校でも補習をしてもらっていて、夜間中学での学習効果は明らかではない。しかし、わからないことがあったら、すぐに聞くことができる学習環境を保障することが、Bさんの安心につながっている。

■生徒C:ひとり親で仕事のために、子どもが一人になる時間が多く心配。

- ・子ども：中学生：家で一人で過ごすことが多く、ほとんど孤食。
- ・夜間中学での取組  
夜間中学で時間を過ごせることを子どもに提案。  
Cさんにも上記のことを伝え、中学校の担任やSCとも共有する。
- ・結果  
Cさん、Cさんの子ども、夜間中学の教員との間で、連絡手段を作って、互いに必要な時は連絡できるように

なった。中学校とも複数回情報の共有を行い、Cさんの安心につながった。

今回の取組をとおして、生徒の子どもが通う学校と夜間中学との連携は必要であり、その子どもにとっても、安心して学校生活を送るうえで有効であるということを確認しました。まだまだ全体化できていないのが課題です。今後、さらにSCとの協働を模索し、生徒が安心して学べる学校づくりを進めていきたいと考えています。

## ②校外学習について

野外活動や火おこし体験が人間に与える影響や効果については、これまでに多くの研究・調査が行われており、メンタル面および身体面への好影響や、脳機能の活性化など数多く報告されています。今回の校外学習における主なねらいは二点あります。1点目は、前年度に引き続き、主体的・協働的な学びの構築を図ること、2点目は、交流の深まり方を検証することです。

経済的な負担が軽減されたことで、これまで参加が困難であった生徒さんの参加が可能となり、参加者数は最終的に50名を超える規模となりました。生徒さんの増加に伴い、生徒さん同士の自然な会話が生まれただけでなく、育てる会の方々や職員との交流も活発化しました。活動中は終始、生徒さんの表情も明るく笑顔が多く見られるなど、活気に満ちた学びの場となりました。また、生徒さんの人間関係力の向上に寄与するとともに、日常的に抱えがちな心理的負担やストレスの軽減にも一定の効果をもたらしたものと考えられます。

火おこし体験は、交流を深める観点において特に高い効果が認められたコンテンツの一つでした。火おこしのリハーサルとして、令和7年6月20日に理科の授業で事前に取り組んだことも、本番での円滑な実施につながったと考えられます。活動当日は、過去に火おこしの経験を有する生徒さんや、実際に火おこしに成功した生徒さんが中心となり、未経験の生徒さんに対して「もう少しこうするとよい」「この点を意識すると成功しやすい」といった助言を、言葉や身振り手振りを交えながら、国境を越えたコミュニケーションを行う場面が多く見受けられました。その結果、生徒さん同士のコミュニケーションが自然に促進され、火おこし体験

中は終始、笑顔や笑い声、成功時の歓声が絶えない、非常に活気のある雰囲気形成されました。また、参加した生徒さんは成人であることから、火おこしの要点や成功のための工夫を的確に捉える力が高く、教える側・学ぶ側の双方において理解度の水準が高いことが確認されました。さらに、火おこしによって得られた火を用いた食事の時間においては、和やかで一体感のある雰囲気が生まれ、普段は会話の機会が少ない生徒さん同士や、育てる会の方々との間でも自然に会話が広がりました。

本事業を契機として事業終了後においても、生徒さん同士が自発的に会話を交わす場面が増加していることが確認されています。以上のことから、野外活動および火おこし体験は、協働的な学びの深化と人間関係の形成を促進する教育的コンテンツとして、極めて有効であったと評価できます。